

蟲の背に

皮膚を啄ばむ群青の破片
夜の斜め後ろから差し込まれてくる叫びに
つと見上げる斜め後ろの荒野
ベッドの下指先の向こうから
零れ落ちる蚕の繭
幾重にも巻かれた眼球が
窪みから弾き出された
注射器の中で
青インキが漏らす溜息

針の中を血色のいい獣が滑りおりていった
白い服を着たひと
の前で
皮膚に絵文字を書いてみる
血が薄くなっているから
通りに雨が降る
回収業者に渡した足が疼く
ゴミ捨て場の猫
捨てられた電信柱が
錠剤に群がる
痛覚を漂白した
漂白剤を
近所のひとが通りに捨てる
注射針のインク
ひく前に
背中に乗る

死亡時刻

脳が酸素を食む午後と午前の宙空
蒸発するのを待つ

待っている、から

血管の沸騰を、黙って

聞いている床下の死亡した肉体

腐乱の犬

動かない前足と

潰れた鼻が鳴くのは何で

引き出しに私を仕舞った

折り畳んでマツチ箱の中へ

水分を抜く

先に針の付いたチューブを刺して

ポンプを動かす

乾びた皮膚が蟲

つぼく音を立てる

カカカカ

一体つつ仕舞うから毎日

三百六十五日

三百六十五日

私で一杯になる

乾燥した私

乾燥したふくらはぎは

展覧会の中央に飾ってある

白昼堂々

壁を壊す

腐敗途中の薬指、が

妄犬

一周するたび

床に積まれている黒い束

喉に巢食った細菌が

唇の端に上ってきた頃

Tというヒトが訪ねてきて

食事に連れ出す

首輪の付いたままで

蛙の切った物を喉に押し込む

塞ぐと

生物となり跳躍した

凝視することを不具合にしたT

喧騒に

叩きつけて割った

鎖が引かれる

瀕死に解体されて

今はただの端切れである

修復される毛皮の家

伸び始めた蔓

遅れてきた

Fというヒトが連れ出す

連れ出される

式に

つんざく

一匹の盲犬

剥がされる皮

拭かれる牙が

色を奏でる